

Title	梁啓超與清季革命, 張朋園著
Sub Title	Chang Peng Yuan (張朋園) Liang Ch'i-ch'ao and the revolution in the later Ch'ing Dynasty (梁啓超与清季革命)
Author	和田, 博徳(Wada, Hironori)
Publisher	三田史学会
Publication year	1965
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.3 (1965. 12) ,p.125(425)- 127(427)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19651200-0125">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19651200-0125</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

後半においている。それでは一体、会則厳守派・緩守派は、各々いつ頃からいつの経過を経て形成されたのであるか、またそれは、先行する *zelanti* & *ministri* と如何なる継承関係にたつのであるか。筆者はこれについて、今後なお多くの視角からの研究が必要であると思うが、特にフランシスコ会とアヒム主義の関係を徹底的に研究する必要があると考える。P. Sabatier はかつて聖フランシス自身すでにヨアヒムの影響を受けたと考えた。しかしヨアヒムの極端なスピリチュアリズムと聖フランシスのクリストの人性に対する愛を対比する時、その思想的傾向の相違は大であるといわねばならぬ。J. Ratzinger の最近の研究も、ヨアヒム主義のフランシス会の渗透はむしろ十三世紀中葉以降と考えているようである。この時期に修道会内に渗透したヨアヒム主義が、会則厳守派の信条形成を促したこととはまことに間違いないが、それが会の如何なる階層に受け入れられ、また如何なる作用を及ぼしたかはなお今後の問題といえよう。

譜長編初稿」民国四十七（一九五八）年刊の両著を初め数多くの研究が発表されている。しかし、近代中国の政治・経済・社会・思想の中国近代史上に占める地位を正当に評価するのは容易なことではないので、未だなお明らかでない点が少なくない。本書は梁啓超と中国革命運動との関係に焦点をしぼつて、従来あまり注意されなかつた清末革命史の重要な一面を明らかにしようとしたものであるが、梁啓超に関する研究としては前述の両著とも並ぶ労作である。最近の中国近代史学界における貴重な成果の一つであるように思われる。この本の構成を示すために、その章節を掲げれば左の如くである。

### 一、緒論

#### 1、「求變思想的基礎——梁啓超接受中西文化的過程

##### (1) 在中国文化中求變——三世之義

#### 2、「在西洋文化中求變——民權・自由・進化

##### (1) 明倡民權

##### (1) 隱言族類

#### 3、「啟蒙思想与鼓吹革命——梁啓超戊戌之前的激進言論与志氣

#### 4、「新民・破壞・革命——梁啓超流亡日本前期的革命言論

##### (1) 破壞以建民國

#### 5、「坐而起而行——梁啓超与革命党的合離始末

梁啓超與清季革命　張朋園著

和田博德

(一) 孫梁始合而終離

(二) 自籌革命起義

六、異曲同工——梁啓超流亡日本後期的言行

(一) 言論轉變的由來

(二) 避革命之名、行革命之實

七、他山之石——梁啓超與革命黨論戰的影響

(一) 論戰述要

(二) 開明專制與約法訓政

(三) 土地國有與國計民生

八、言論界的驕子——自報章發售數字看梁啓超言論的影響

(一) 中外公報

(二) 時務報

(三) 清議報

(四) 新民叢報

(五) 新小說

(六) 政論

(七) 國風報

## 九、結論

以下に本書の内容の大要を述べることにする。

梁啓超の政治活動は一八九五年日清戦争の敗北を機として始まつたが、その後一八九八年の戊戌政変の時まで梁啓超は穩健な方法によつて清朝を改革することを希望していた。そのころの彼の改革思想は康有為から学んだ中国古典の三世之義に拠り、中国を昇平世よ

り太平世へと推進しようとするものであつた。彼の太平世の理想は民権政治であり、国会を開いて国民が国政に参与し得るようになることを目標としていた。この太平世に到達するため、彼は光緒帝に上書したり、湖南巡撫を助けて新政を実行させるなど、政府当局に向つて種々な改革を献策し、また中外公報や時務報などを刊行して人々に改革思想を宣伝した。

しかし、戊戌政変後、日本に亡命して西洋近代思想に接触した結果、梁啓超の改革思想は急進的になり、その実現方法も過激となつた。こうして梁啓超は當時同じく日本に亡命中であつた孫文らの革命派と協力して清朝打倒を図るに至り、その師、康有為に清朝を見限つて、反清を明白にすることを迫ろうとさへした。そして清議報を発行して、天賦人権・三権分立などの西洋近代思想に基づいて專制政体を攻撃し、清朝政府の昏庸無知を暴露して中国人の民族意識を換起した。一九〇〇年、專制政府に反対して自立軍事件が起ると、梁啓超はこれに参画したが、その失敗後も彼は新民叢報を発刊して反清革命の言論を唱え、民主政体の建設を主張した。同時に新民叢報の政論だけでは革命を起すに足らざるを恐れ、雑誌「新小說」を創刊して小説により中国人の革命行動を促した。

このような梁啓超による革命の鼓吹は大きな影響を与え、孫文らの革命派の運動と共に、中国全土における革命の気運を急速に盛り上らせた。ところが一九〇三年、この革命気運の高まり行くさなかに梁啓超は突如百八十度の大転換を行ない、革命は中国当時の情勢に適さない旨を宣言した。それは主として列強に囲まれた当時の中

国で革命を起せば分割される恐れがあるという理由からであつたが、これより以後、梁啓超は革命陣営を離れ、革命派と敵対関係に入つたのである。革命派が武力革命による清朝打倒後の中国改造を提倡したのに對し、梁啓超は平和改良による清朝打倒後の立憲君主政体の建設を主張した。こうして梁啓超は革命運動から立憲運動へと転換したが、この頃には既に革命思想が全国を風靡して、革命は必至の形勢となり、立憲運動は失敗すべき運命にあつたから、彼の転換は中国革命にとつては勿論、彼にとつても不幸なことであつた。

梁啓超が中国革命史上にその歴史的地位を占め得なくなつたのは辛亥革命前夜における彼の立憲運動への転換の結果である。

このように梁啓超と革命派との分裂は革命運動に大きな打撃を与えたが、分裂後においてもなお彼の革命批判は反つて革命派の理論や方法を進めるのに役立ち、革命に対し間接的な貢献があつた。かくして梁啓超は辛亥革命と直接の關係はなかつたが、彼の思想と言論が革命に及ぼした影響を決して低く評価することはできない。

従来一般に梁啓超は立憲改良主義者と見なされて、革命の先覚者としては説かれていなかつた。しかし、梁啓超はもともと革命主義者であつたので、辛亥革命の二大主義—民族主義・民權主義も早く彼が宣伝したところであり、その後、立憲派に転向してからも、彼の改革主張は多くの人々を覺醒させ、深く啓発して、間接的に革命に貢献したことを忘れてはならない。

以上が本書の内容の大要であるが、これによつても知られる如く、本書の特色は従来一般に立憲派に屬して革命を阻止した人物と考え

られて来た梁啓超のために弁護して、彼が実は革命主義者で革命に頗る貢献があつたことを強調した点にある。これは確かに從来閑却されていた梁啓超の清末革命史における歴史的役割の重要な面を明らかにしたものと言えよう。しかしその反面、梁啓超を弁護するのに急なあまり、彼の革命に対する貢献をやゝ誇張し過ぎているように思われる個所もなくはない。また一九〇三年に梁啓超が立憲派へ転向した原因に関する考察なども未だ充分とは言えないようと思われる。

このように本書にはなお直ちに肯定し難い点も若干見られるが、清末における梁啓超の言動を綿密に研究し、例え第七章において「中外公報」以下の彼が主宰した諸雑誌の刊行年月、発行部数などを詳細に考証して、その影響範囲を推定するなど、清末の多くの重要な問題を明らかにしている。また梁啓超は日本に久しく亡命して、日本との關係が深く、亡命中の彼と革命派との結合に努めた平山周氏は本塾の平山栄一商学部教授の尊父であり、そして私がかつて明らかにしたように梁啓超はアジア近代化の先駆者としての福沢先生を尊敬し、その独立自尊主義の中國導入をはかつた人であつたので、この意味からも本書は興味深い書であると思う。なお巻末に附された梁啓超大事年表及び参考書目も簡単ながら便利である。

(中央研究院近代史研究所專刊十一、中華民国五十三年五月初版、三四五頁)